

宗教倫理学の展望と宗教者の役割——エネルギー政策を語るために

同志社大学 小原 克博

1. はじめに——宗教倫理の視点

1) 宗教倫理がなぜ必要か——個別と普遍

宗教倫理からのフィードバック

2) 宗教倫理の方法論——二つのインターフェイス

- interfaith: 宗教間対話を通じて共通課題を探る(排他的な自己讃美に陥らないために)。
- interface: 学際的研究を通じて社会的要請に応える(自己完結した宗教的世界に安住しないために)。

2. 環境文化と宗教倫理

1) 自然的環境、社会的環境、精神的・宗教的環境

2) 事例——ジャワ島バロンとジェパラにおける反原発運動

2007年、ジェパラにおいてイスラームのウラマが宗教者会議を開催。原発建設を禁止するファトワ(宗教判断)を発表(加藤久典「対峙するグローバル文明とローカル文明——ジャワにおける反原発運動の示唆するもの」、比較文明学会・関西支部編『地球時代の文明学2』京都通信社、2011年、159-181頁)

運動の中心「反原発市民連合」(KRATON)

- 学生を中心としたNGO
- イスラーム団体ナフダトゥル・ウラマ(NU): 利益より不利益が勝っているという判断。訪日調査したNUジェパラ支部長のヌルディン・アミン氏は無条件反対の立場。
- バロン住民連合(PMB): 自然との調和を重視するジャワ文明の立場から反対。

3. 近代日本の宗教思想における自然理解——キリスト教を中心に

1) 内村 鑑三(1861-1930)

今、ここにお話しいたしましたデンマークの話は、私どもに何を教えますか。(中略) 第二は天然の無限的生産力を示します。富は大陸にもあります、島嶼(とうしょ)にもあります。沃野にもあります、沙漠にもあります。大陸の主(ぬし) かならずしも富者ではありません。

小島の所有者かならずしも貧者ではありません。善くこれを開発すれば小島も能く大陸に勝るの産を産するのであります。ゆえに国の小なるはけっして歎（なげ）くに足りません。これに対して国の大なるはけっして誇るに足りません。富は有利化されたるエネルギー（力）であります。しかしてエネルギーは太陽の光線にもあります。海の波濤（なみ）にもあります。吹く風にもあります。噴火する火山にもあります。もしこれを利用するを得ますればこれらはみなことごとく富源であります。かならずしも英国のごとく世界の陸面六分の一の持ち主となるの必要はありません。デンマークで足りる。然（しか）り、それよりも小なる国で足りる。外に拓がらんとするよりは内を開発すべきであります。（「後世への最大遺物——デンマルク国の話」1897年）

2) 賀川 豊彦 (1888-1960)

貧民救済、社会運動に取り組んだ賀川にとって、社会の矛盾、「悪」の問題を無視することはできなかった。内村のように「宇宙の靈魂」の支配する調和的な世界ではなく「宇宙悪」に関心を寄せ続けた。

3) 新島 襄 (1843-1890)

看山高巍々 観海濶洋々 味得造化妙 小心少発揚（『新島襄全集』第4巻、307頁）

ニューイングランド・ピューリタニズム（特にジョナサン・エドワーズ（1703-1758））の自然観の影響

4. 現代の自然理解としての生物多様性

1) なぜ生物多様性か

- 生物多様性とは

生物多様性は生態系の豊かさやバランスだけでなく、生物が過去から未来へと伝える遺伝情報の多様性を問題にしている。したがって、環境問題に歴史的な次元を加え、自然や動物と人間の宗教史的な関係の多様性を評価し直す上でも、生物多様性は有益な視点を与えてくれる可能性がある。

- 生物多様性と創造論・終末論

生物多様性は、近現代のキリスト教においては、進化論論争として現象化していた。ただし、進化論論争が創造論を中心主題としていたのに対し、現代の生物多様性をめぐる問題は終末論への親和性を持つ。

2) ヘルムート・リチャード・ニーバーの徹底的唯一神主義

- シュヴァイツァーの「生への畏敬」を「生けるものの共同体という単一神主義（henotheism）」として批判し、「徹底的唯一神主義（radical monotheism）は、死せ

るものへの畏敬をも含む」として、それが非有機的存在への畏敬をも含むと主張する。

(H. Richard Niebuhr, *Radical Monotheism and Western Culture: With Supplementary Essays*, Westminster John Knox Press, 1993, p. 37)

- 一神教概念の新しい可能性が示されているが、観念的なレベルにとどまっている。
- 3) サリー・マクフェイグの環境の神学
- 世界を「神の体」とみなすメタファーとしての有効性と共に限界も自覚している。"I am not even afraid of pantheism; the line between God and the world is fuzzy." (Sallie McFague, *A New Climate for Theology: God, the World, and Global Warming*, Fortress Press, 2008, p. 120)
 - 示されている神学的ビジョンは有益。しかし問題は、この世界にどのような形で神の霊が宿っているかではなく、むしろ、人間が自らの「身体性」をどのように自然世界に拡張できるかにあるのではないか。また、自然と人間をつなぐ媒介項（たとえば動物）に対する言及はほとんどない。

4) アンドリュー・リンゼイの動物の神学

- 「私が示唆したいのは、権利の概念は道徳神学と十分に両立するものであり、それは動物をも含むように正しく拡張されるのが正しいということである」(アンドリュー・リンゼイ『神は何のために動物を使ったか——動物の権利の神学』教文館、2001年、20頁)。
- 権利論を中心に主張を展開。非西洋圏ではどの程度有効か。

5) 生物多様性の宗教倫理的な効果

- 日本の自然観の優位性を説く文化ナショナリズムに対して
この種の議論は環境問題に対する責任意識を麻痺させるため、有害な側面を持つ。安易に「自然との共生」などを説くことができないほど、人間による自然破壊が深刻であることを「生物多様性」は教える。
- 呪術的畏れの回復ではなく、科学的手法による「畏敬の念」の回復
呪術的メカニズムが全体的連関を考慮しない閉じた因果論であるのに対し（悪行→祟り）、「生物多様性」は閉じることのない生命の連鎖と系譜へと視線を向けさせる。

5. コミュニティ論とエネルギー政策

1) コミュニティ論：「道徳的コミュニティ」(moral community)の拡大

2) 「犠牲」の意味

- 伝統的共同体には、相互犠牲のシステムが組み込まれていた。

- 近代国家は、その信頼関係を別の形で作らなければならなかった（→ナショナリズム）。
- 課題：「犠牲」の意義をいかに健全に保つか、また、拡張できるか（国家的価値に回収されない拡張性・公共性）。

3) エネルギー政策

- 未来予測を含む（→世代間倫理）
- エネルギー利用に関する倫理的判断の「結果」から受けるインパクトは世代間によって異なる。たとえば、放射性廃棄物の処理は、どの世代まで先延ばしすることが倫理的に許されるのか。
- 技術的・経済的視点だけではなく、環境文化（宗教文化を含む）の視点からの洞察も必要となる

4) ドイツの決断

- エネルギーの安全供給に関する倫理委員会（2011年4月に作業を開始）
- 報告書（5月30日）「キリスト教の伝統とヨーロッパ文化の特性に基づき、我々は自然環境を自分の目的のために破壊せず、将来の世代のために保護するという特別な義務と責任を持っている」
- 6月6日、原発の全廃（2022年までに）を閣議決定
（熊谷徹『なぜメルケルは「転向」したのか』日経BP社、2012年）

5) 世代間におけるエネルギーの適正配分

6. まとめ

- 1) 宗教倫理の視点がなければ・・・
- 2) 環境文化・宗教倫理はエネルギー政策に影響を与え得るのか？
- 3) 宇宙論的な視点が機能していた時代からの問いかけ
- 4) 科学時代の自然理解に求められているものは？
- 5) 持続可能な共同体を考えるために必要な視点は？